In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	水内俊雄先生の退官にあたって：東アジア地域における「ホームレス」研究の先駆的役割
Author	中山, 徹
Citation	都市と社会. 6 巻, p.21-25.
Issue Date	2022-03
ISSN	2432-7239
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	特集 1：水内俊雄教授退職記念論文
DOI	10.24544/ocu.20230119-013

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

都市と社会 第６号，2022，pp.21～25

〔特集１：水内俊雄教授退職記念論文〕

水内俊雄先生の退官にあたって
―東アジア地域における「ホームレス」研究の先駆的役割―

中山徹（大阪府立大学名誉教授、大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員）

はじめに

筆者が水内先生と初めてお会いしたのは、1998年～1999年実施の大阪市による大規模調査[1)]実施に向けた調査会議であった。著者は、1996年実施の「あいりん地域日雇労働者調査」）社会構造研究会）に参画した福原宏幸先生と一緒にこの大規模調査に加わることになった。調査会議で、水内先生は、いつも東芝製の最小パソコン（TOSHIBA Libretto20、windows 95）を持参して参加されていたのを鮮明に覚えている。

概数調査については、昼間、中之島周辺の野宿者を数えるといった方法も検討されたが、野宿者の概数調査方法として、全市の悉皆調査・夜間調査により「寝ている野宿者」を数えるという方法が決定された。事前調査として、大阪市内のアーケードがある商店街への聞き取りや大阪市内の交番（鉄道警察含む）への聞き取り等を実施し、この聞き取り結果をもとに、大阪市内のホームレスの居場所が地図化され、そのデータをもとに、市内全域の夜間調査が実施された。水内先生を中心とした地理学のチームは、専門だけあって、事前調査やマップづくりは徹底したものであった。貧困・社会政策分野を専門とする者にとっては、その手法は驚嘆に値するものであった。日本におけるホームレス研究に地理学の手法を活用したこの調査研究は、日本のホームレス研究において先駆的なものであったと考えている。

その後、水内先生は、NPOホームレス支援全国ネットワークによる厚生労働省社会福祉推進事業の各種調査等の中心的メンバーとして活躍してこられた。また、和歌山県新宮市の地域福祉計画（第１次地域福祉計画～第３次地域福祉計画）の作成の責任者として、さらに、大阪西成区特区構想の具体化等に大きな役割を果たしてこられた。

ここでは、水内先生の多様な研究分野と多数の業績がある中で、東アジア先進地域における「ホームレス問題」に焦点を当てた調査研究、特に、台湾における調査研究を振り返り、その先駆的役割について、調査研究過程でのエピソードを含めて述べたい。

なお、都市研究プラザの東アジアに関する調査研究については、水内先生のこれまでの科研報告書や都市研究プラザの刊行物を参照して頂ければ幸いである。

１．東アジア先進地域におけるホームレスに関する調査研究の経緯

ホームレス問題は、2000年代初頭、日本だけでなく、英国、フランス、ドイツ、アメリカや台湾、香港（中華人民共和国特別行政区）、韓国といった東アジア先進地域においても、大きな社会問題となった。そこで、2000年前後から、大阪市・大阪府のホームレス調査研究に関わる地理学、経済学、社会政策等と異なる専門領域の研究者が、欧米のホームレスだけでなく、東アジア（台湾、韓国、香港）のホームレスの実状、民間支援団体の活動、支援の仕組み等に注目して、海外現地調査を開始した。筆者もこの調査研究チームに参画し、大阪市や大阪府等のホームレス調査や欧米のホームレスの英国班として調査研究に加わった。欧米のホームレスに関しては、福原宏幸先生、中村健吾先生等が中心となって進められた。著者は、英国班として参画した。

東アジア先進地域におけるホームレス問題の調査研究を取り組み始める契機となったのは、水内先生提供の英論文であった。英文コピーに多くの下線が引かれていた。そこには、IMF危機の結果、ソウル駅

と近隣の公園に約 2000 人の失業を契機としたホームレス（「露宿者」）の存在が指摘されていた。そこで、福原先生と２人で韓国・ソウル市を訪問したが、「タシソギ支援システム」といったホームレス（露宿者）対策が実施されていたため、ソウル駅の地下街等以外では、ホームレスの存在を十分目視することはできなかった。「入口」（相談窓口）→「中間居住施設」→「出口」（就労等）といった支援システムが体系化されていることが明らかとなった。その後、私の演習生が韓国におけるホームレス支援団体（韓国における全国規模のホームレス支援団体「全国失職露宿者対策宗教・市民団体協議会」）に就職したことあり、当該団体や関連団体（シェルター、社会福祉館等）の各施設への聞き取り・現地視察を開始することになった。

その後、水内先生を研究代表者とする科学研究費が採択(2001～2003年､2003年以降も採択される)され、東アジア先進地域におけるホームレスに関する調査研究を本格的に実施することになった。韓国については、現地調査地域もソウル市だけでなく、水原市、大邱市、釜山市等へと拡大していった。また、現地調査対象も、「チョッパン・エリア」、「ビニール・ハウス・ビレッジ」といった等居住不安定者の集中する地域へ拡大していった。

水内先生を研究代表とするホームレス関連の科研費については、科研データベースを参照されたい（https://nrid.nii.ac.jp/ja/nrid/1000060181880/）。

この調査研究の主な対象は、台湾、韓国、香港（中華人民共和国特別行政区）であり、ほぼ毎年、これら地域のホームレスに関する支援団体、行政への聞き取り等の現地視察を実施することになった。

ここでは、主に、台北市の「遊民支援」の展開過程で水内先生の調査研究チームが果たしてきた先駆的役割について紹介する。

2. 台北市を中心とした「遊民」調査の契機

台湾の遊民調査は、当時、台北市社会局のホームレス専任ソーシャルワーカーであった楊運生氏と後に加わる張献忠氏による積極的な受け入れにより可能となった。

水内先生が、最初に台湾のホームレス問題のキーパーソンである楊運生氏にアプローチした。「約500人の台北市内のホームレス情報を持っている人を見つけた」と語っていたことを覚えている。

台湾では、ホームレスを「社会救助法」（台湾における公的扶助制度を規定している）では「遊民」と規定している。したがって、当時の台北市社会局では、「遊民支援サービス（服務）」となっていたが、現在「街友支援サービス（服務）」に変わっている。「遊民」という言葉が差別的意味合いもあるということから、現在、「街友」と呼称するケースも増えている。

著者は、２回目の調査から参加した。台北市に遅れて到着したため、ホテルのある台北駅周辺で迷子になったが、日本語を学んでいる小学生達にホテルを教えられ、調査メンバーと合流がすることができた。

この時、楊運生氏が案内してくれたポイントは、台北市で最も古い萬華区の龍山寺とその前にある「艋舺公園」（ホームレスが集中している公園）、「三水街」（社団法人芒草心慈善協会の最初の事務所と夜間シェルター等を運営していた場所）にある露天市場（盗難品などが売られているケースもあるため写真・ビデオ撮影はしないように注意された）、台北大橋（新北市と台北市に架かっている橋）の台北市側は、青空・日雇労働市場）であり、作業・建設道具を持った人達が仕事を求めて集まる青空労働市場である。だが、調査参加者は、橋を渡ってくるバイクの多さに唖然としていた。

また、台北市社会局の楊運生氏が勤務している遊民専門チームの事務所（萬華区社会福祉センター）や遊民が集中している萬華区、中正区、大同区のいわゆる野宿現場を案内してもらった。中正区は、台北駅構内やその周辺であった。

この時通訳してくれたのは、水内先生の手配により、中華人民競歩国中山市で日本企業に働いていた地理の出身の山田理絵子氏であった。これ以降、山田氏が通訳として参加することになった。その後、当時台湾大学の大学院生であった蕭閎偉先生が加わった。

3. 台北市における「遊民」調査の展開

水内先生の調査チームの対象は、路上の現場だけでなく、様々な民間支援団体と当該団体運営の中間施設や就労部門を担当している労働局、楊運生、張獻

忠氏がホームレス向けに開拓した低家賃の賃貸住宅とその大家、当事者、低所得者集中地区である「忠勤里」（里長—方荷生氏）等へと拡大していった。その過程で、都市研究プラザが主導して、台北市に新しい遊民・貧困者支援団体・社団法人芒草心慈善協会が設立された。

第１に、多様な支援団体の聞き取りである。台北市が、最初に設置した福祉的支援を必要とする「社会型遊民」の入所施設である「遊民収容センター」をはじめ、「遊民」集中地区である萬華区の民間支援団体の多様な中間施設（「中途の家」・シェルター）や台北市社局管轄の低所得者向け住宅（「福民住宅」）などである。例えば、ドロップ・イン・センター的機能を持つ「平安站」、「恩友センター」や稼働能力のある「経済型」遊民向けの「財団法人創世社会福利基金会・平安居」（現在は廣安居」・公設民営が担当している）、「財団法人昌盛教育基金会」の「中途の家」等、日本人スタッフがいた基督教系の「活水泉」、仏教系の支援団体等があげられる。大阪公園のホームレス支援にも参加したことがある仏教系支援団体の盛大な歓迎に驚いた記憶がある。また、新北市に立地している「台北市遊民収容センター」は、脱走兵等の元刑務所であっただけに、その面影を色濃く残している施設であった。2002 年の台湾における SARS 禍による遊民の隔離施設（現在）を訪問した。「林口」にある元海軍基地には、マイクロ・バスで訪問したこともあった。「経済型遊民」の支援施設では、入所者は、求職活動のため昼間は施設にいることができない等、日本とは大きく異なっていたことが印象深かったことを覚えている。

第２に、台北市におけるもう１つの公的支援の拠点である台北市労働局（旧労工局）である。そこでは、稼働能力のある「遊民」に対する求職のため支援だけでなく、コンピュータによる GIS を活用して、稼働能力のある遊民を検索で析出することができるシステムを構築していた。

第３に、元遊民の住居を訪問と彼らへの聞き取りを家主に対する聞き取り調査等である。龍山寺の裏にある元ホームレス向け住居の狭小さと居住設備の劣悪さに驚いた。さらに、当事者（室内や路上で）や「家主」への聞き取りも実施した。

第４に、楊運生氏の担当地区であった中正区忠勤里（南機場）の老朽化した集合住宅の居住者等に対する先駆的地域活動への視察・聞き取り調査があげられる。里長である方荷生氏は当初事務所の隣で学習支援を行っていたが、その後、「地域通貨」と「フードバンク」を連携させるサービスや旧軍人宅を地域住民との協働で改装し、新しい食堂・図書館等を持つ多機能なコミュニティ・センターを開設する等、その実践を発展させている。楊運生氏の寄稿文にある写真がその当時の状況を示している。

現在、全泓奎氏が中心となって実施されている「東アジア・インクルーシブ・シティ・ネットワーク（EA-ICN）の構築に向けたワークショップ」の第１回目の開催は、同地区の既存のコミュニティ・センターでなされた。このワークショップには、日本、香港、韓国、台湾の研究者だけでなく実践活動家等と幅広い参加者となって現在に至っている。

第５に、指摘しておくべきは、都市研究プラザの「台北サブセンター」として、2011 年「社団法人芒草心慈善協会」が設立されたことである。初代理事長は楊運生氏で、当初の主な活動内容は、「国際交流と国際交流，ホーレ文化および政策」であった。萬華区の「三水街」（日本統治時代の「伝統的市場」は現在リニューアルされている）の古いアパートの２階の１室に、同協会の事務所（住まい兼用）が設けられ、何度か水内先生と訪問した。

同団体との交流を通して、都市研究プラザを中心とした日本におけるホームレス支援手法が台北市に持ち込まれることになった。例えば、楊運生氏による「平安報」発刊（「なにわ路情」の台北版）、同団体の「キャラクター」と同じ図柄のマグカップ製造（有村潜氏の「釜やん」の台北版）、また台北市における「ビッグ・イッシュウ」発刊の側面支援などあげられる。その後、事務所を何度か変えるとともに、台湾大学等の研究者や若いボランティアがスタッフとして参画するようになった。

その後、同団体は、既存の支援団体が、台北市社会局の「遊民」支援施策の担い手・受け皿であった既存の支援団体とは異なり、視野の広い独自の新しい自立支援の仕組み（「オープン・ドア」）を創りあげてきた。

図１ 社団法人芒草心慈善協会設立の経緯とキャラクター

✚ 關於芒草心

我們如何開始的?

芒草心是由一群服務街友的第一線人員組成，2011 年成立，一開始以國際交流為主，和日本、香港、韓國等地的第一線服務人員交流經驗，互相學習。

從2014年開始擴展版圖，以更實務的角度協助無家者及貧困者。除了開始實際規畫執行無家者自立方案，如街友導覽 (街遊)、起家工作室、自立支援中心；也著手舉辦流浪生活體驗營、「呷飽未」社區共食餐桌，期望透過更多體驗與交流，進一步幫助外界了解貧困者的生活樣態。

我們期待透過這些方案的推動，培力我們的服務對象，除了足以自立之外，更能進一步為自己發聲。

資料）https://www.homelesstaiwan.org/

幾つか示すと、その第１は、ホームレス当事者による「街歩き」（「街遊」）事業である。

元遊民が自分と係わりのある地域を案内するというプログラムである。

第２は、就業支援策としての「起業スタジオ（起家工作室）」を創設した。その業務内容は、建物修繕・内装等の熟練者を組織化し、地域における貧困・低所得者の住まいの修繕などの仕事づくりである。

第３は「ホームレス生活体験」プログラムである。若者を対象に、事前に炊き出し等の情報を伝えた上で、２日程度萬華区周辺で路上生活を経験してもらうというプログラムである。

このように、同団体は、「遊民」を主な対象としながらも、萬華区等の貧困・低所得者等に対象を広げ、就労支援と居住支援を通した当事者の自立を図るプログラムや地域住民等への啓発活動等を展開している。

現在、同団体は、貧困・低所得者向け居住資源が乏しい台北市において居住資源を提供するとともに、新たな不安定居住者支援等を目的としたプログラム（「借上・管理システム」（「包租・代管」））の実施団体として、台北市における居住支援の一翼を担う団体として発展してきている。

以上、台湾を中心に台北市におけるホームレス支援の経緯と展開の概要を紹介した。2000 年初頭の水内先生の提起によって開始された東アジア先進国におけるホームレス研究が単なる調査研究にとどまらず、支援の実践にも大きな役割を果たしてきたことが明らかとなったと考える。都市研究プラザの台北サブセンターの設立や台湾の地理学研究者との関係もこれらを支える基盤となったと考える。

最後に、水内調査研究チームの特徴と調査過程での幾つかのエピソードを紹介しておきたい。

最大の特徴は、研究者だけでなく、大学院生、西成区の簡宿のオーナー（「おはな」の西口氏）や同区地域活動家（有村潜氏）など多種多様なメンバーから構成された点である。１回の調査チームメンバーの数は非常に多かった。そして、この調査研究に参画した大学院生は、その後、研究者となっていった。この調査研究チームは若手研究者養成の「母胎」となったと言えよう。

そして、多くの大学院生や現場実践家が参画する調査であるあることから、コスト面で、大幅な節約が図られた。その最大のものは「ホテルコスト」の節減である。現地調査では、極めて安価なホテルが選択された。時には「ラブ・ビジネスホテル」に宿泊するこ

ともあった。著者は、水内先生と同じ部屋であるケースも少なくなかった。台北市では、当初、国立台湾師範大学のゲストハウスが常宿であった。韓国では、コスト削減のため「オンドル部屋」に宿泊した。香港では、香港バプテスト大学のゲストハウスが利用された。

また、現地での食生活を知る事や経費節減のため夜市等で食事をとる機会は非常に多かった。観光客が訪れるような有名飲食店の経験は極めて少なかったと記憶している。

この調査研究実施過程では、様々なトラブルにも遭遇した。例えば、著者が調査チームからはぐれて迷子になった事や全員が同じ食事をしたにも係わらず、大学院生が食中毒になった事もあった。

そして、水内先生がパスポートの有効期限との関係で、予約した便に搭乗できず、帰宅せざるを得ないというインシデントもあった。訪問の具体的内容を認知していなかった著者達は台北市に到着したものの、現地ですべき業務が分からないということもあった。そのため、キーパーソンである楊運生氏が、新北市にある台湾最大の「ハンセン病」施設や紅陣頭の現場などを案内してくれた。台湾における戦前の社会事業や遊民の仕事の具体的イメージを得ることができた。

以上、東アジア地域におけるホームレス研究の展開にとって、水内先生とその調査研究チームの果たしてきた役割を概括してきた。定年退職後も、幅広い調査研究活動を行っていかれることを祈念してやまない。

【注】

1) 野宿生活者(ホームレス)に関する総合的調査研究報告書、大阪市立大学都市環境問題研究会、2001 年